
転生っ子世にはばかり

ザキヤマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生つ子世にはばかる

【Nコード】

N0486P

【作者名】

ザキヤマ

【あらすじ】

知らないうちにワンピースの世界にいた最強系オリ主がチート機能な悪魔の実の能力を使って頑張るお話。

Episode 1 (前書き)

処女作なので御目を汚すかもしれませんが、どうぞ見てやってください

Episode 1

「……………ここどこだよ……………」

俺は気がついたたら知らない森、しかも木々が隆々と生い茂るジャングル
の浜辺に来ていた。

海があるって言う事はここが島か、それとも半島と言う事になる。

いや、まあそうとは限らないのだが、なんとなく島か半島である気が
するのだ。

これは俺の野生の勘が物語っているので間違いない。

そう言う事で何故こうなったかはわからないが取り敢えずここを探
索してみることにした。

そう、したのだが

『ジュボオオオオ!!!!』

『グギヤアアア!!!!』

「嘘だろオオオ!!?」

不思議生物の戦闘に出くわして無暗矢鱈にジャングルの中を歩くの
は断念した。

だって巨大なコオロギと巨大なアライグマの戦闘だよ?

鳴き声とかおかしかったし、俺はどんなジャングルに来てしまった
よ……………。

こんなジャングル世界中の何処探してもねえよ。

「うん、そうだ!こう言う時は海岸線に歩いて行くのが定石!」

見知らぬジャングルに来ていたという事で少しテンパっていたのだらう。

なんでそんな簡単な事にも気付かないのかと自分でも不思議に思ったが、この際スルーだ。

それよりも問題なのがさつきから気になっていた視点の低さだ。

明らかに以前より低くなっており、自分の手足を見てみれば短くなっている。

極めつけはボサボサになって伸びている髪の毛。純日本人な俺は生粋の緑の黒髪だったのにも拘らず、今や見る影もなく真っ白。

「なに？老体化！？いやいや、でも体は縮んでるよ！？？どういうこと！？？」

浜辺でむなしく響く俺の叫び。

はあ、もうちょっと散策してここが何処だか確かめるのが先決か。今のところ人には逢ってないけど、こんなジャングルだから無理もないか。

それならここは無入島って言う可能性が高いよな。

でもそれを俺にどうしろと？こんな奇怪な動物・昆虫が生息する島でそいつらと共存すればいいのか？

……そんな馬鹿な……。

俺は動物と心を通わせられるほどムツゴロウじゃねえんだ。

「あ、小屋発見。ツてことは誰かここに住んでる、若しくは住んでたつてことになるな。出来れば今でも住んでいますよーに」

色々と考え事をしながら歩いていたせいで100mほど先に小屋が見えるまで全く気付かなかった。

まあ100mも真っ直ぐ先に見えるほどこの島は広いつて言うこと

で、疲れが溜まる前に見つけることが出来たのは不幸中の幸いか。

『グギヤアアアア！！！！』

『ジユボオオオオ！！！！』

「また出た！？ッて言うかそっちはダメだアアア！！」

先程見事なまでに激しい戦闘を繰り広げていたコオロギとアライグマ。

彼らの喧嘩はまだ終わって無かったらしく、俺が目指す小屋へと被害を及ぼそうとしていた。

中に人がいる可能性があるからというのもあるが、俺の住処に出来るかもしれないという一縷の希望のためでもある。

『グギヤ？』

『ジユボ？』

「あつ、ムツゴロウ出来るのか？」

『グギヤアアア！』

『ジユボオオオ！』

「やっぱり無理だったよオオオ！！」

俺の心の叫びが届いたかと思いきや、不覚だった。

逆に俺の気持ちを逆手に取られ、あの糞野郎どもは楽しそうに小屋を破壊して見せ、その直後に逃げるように海中戦にはいった。

いや、ツて言うかコオロギは海中戦出来るのか？

「はあく。この緊急事態に俺はなんでコオロギの心配なんかしてるんだ？『ジユボ』って鳴くコオロギなんか心配しても無駄だろ。それよりも小屋の中になんか目ぼしいものはねえのかな？例えばこの島でも生きていけそうな武器とか。残念ながら人はいなかったみたいだしな」

あまりのショックで思考が口に出て駄々漏れに。

まあ誰かがいるわけでもないし、訊かれたくない思考をしているわけでもないのに向に構わないが。

まあいいさ。取り敢えずはこの小屋の残骸からなにかこの手掛かりになるモノとか武器とかは探さないとな。

武器、発見。

「これは……フロントロック式のピストル？詳しくはないけどこれってかなり昔に使われてたものじゃなかったか？連射が出来ない火縄銃みたいなものだから、今の世の中どんな貧窮な発展途上国でもこんな旧式のピストル持ってないだろ」

使えそうには使えそうだが、拳銃とかそう言った類は無理だ。

自分に掛かる負担が半端ないからな。

撃った感触は残るが、相手を殺傷したという感触が残らないから日本人には最適な武器だけど。

それでもこの小さな体でそんなもの使えば、どんなにしつかりと踏ん張っても肩がぶっ飛ぶだろう。

そんな苦痛、死ぬより勘弁だ。

「こつちは……剣だな。この変な形は中華刀の類……まあククリ刀とかだろうな。これも今頃持つてるヤツなんて珍しいな。ツて言うか一端の国だったら銃刀法違反で捕まるしな。日本の場合刃渡り5.5cm以上は即アウト、即連行ものだし」

剣もダメだ。

斬った感触が手に残るのは気持ち悪い。これは慣れで克服できるかもしれないが、返り血はあまり浴びたくない。

だって後天性免疫不全症候群とかにもなりたくないしな。

そんなこと考えてたら埒が明かないな。他には何かないのか？

「……………あれだな。悪魔の実だな、たぶん」

銃や剣のほか、何があるかと散策してみたけどあつたのは変な果実だけ。

こんな果実見たことないと、毒があるだろうと、普段の俺なら確実に触れもしないほど奇妙な柄をした果実。

しかしあの巨大生物を見た後にこの不思議果実を見せられても、いまいち危機感と言うものが湧いて来ない。

湧いて来るのは極度の空腹感と好奇心だけだ。

もうこれを食べないとここで死ぬというほど、俺の体はその果実を欲していた。

「食べてみるか。たぶんこつてワンピースの世界だし、この世界で生きていくには必要な力かもしれないしな。弱くなることはないってルッチも言ってたし、たぶん大丈夫だろう」

原作じゃ『悪魔の実を活かせるか活かせないかは能力者次第』ってルッチも言うくらいに、無駄な悪魔の実なんてないんだ。

原作ルフィの役に立ちそうにないゴムだって、血管をパイプにする
ツて言う発想に至れるくらいに便利だ。
そう考えたら超人系パラミシアが得だろうけど、ここで生き残るには自然系ロギアの
方が良い。

「……ツて言うか俺はもうここがワンピースの世界って言う過程で
物事を進めて、何故だと疑ってない。生きることに専念しようとする
のは生存本能からとして、この適応性は説明がつかないな。
まあなんにせよ考えてもわからんことはわからん。取り敢えず食べ
てみるか」

食べたならそれでこの空腹感は収まるだろうし、結局食べるほかない
のだが。

それでも不味いとわかっているのに食べると言うのは些が気が引け
る。

「ええい！ままよ！」

渋っついても道は変わらねエんだ。

食べるほかないと覚悟を決める以前に、半ば自棄になりながらその
果実に齧り付いた。

「……うん。以外にいけるかもな」

自分が初めて下手物好きだと言う事に気付かされた。

まあそれはいいとして、問題は悪魔の実の能力だな。

身体に変化は見当たらないからどうすれば確認出来るのかわからん
な。

「ふんっ！すんっ！はっ！ふんずっ！すんはっ！………なんにも起きん」

悪魔の実を食べてから2時間ほど。

色々と試行錯誤しながら考え得る方法を試してみたが、得られた結果は皆無だった。

もしかして本当は悪魔の実なんて言う人間ビクリシヨールになる果実ではなく、ただの不思議な模様のゲテ果実だったのではないか？そんな果実がこの世にあるのかどうか不思議だが、あの巨大生物の乱闘を見てそんな事を言えるほど適応力がないわけでもない。

ただここが『ワンピースの世界』か『それ以外の狂気な異世界』かと言うことで、俺がいた日本でも世界でもないと言うことだけは確かだ。

取り敢えず………また海岸線沿いに歩いてみるか。

Episode・1 (後書き)

感想とかいただければ嬉しいです。

駄文ですがこれからもよろしく願います

Episode・2

「へえ〜。こりゃワンピースの世界で確定だな」

何処かに人が住んでいそうな場所がないかと歩き始めて1週間、もと居た場所にも戻れない状況で、俺は航海日誌を見ながら歩いている。

航海日誌はあの大破された小屋の住人だった者のモノらしく、偉大グランドなる航路ランドラインやら嵐カームヘルトの帯やら海軍本部やら、色々と身近で遠い単語が出て来たのでここがワンピースの世界だと確信した。

それでもここが偉大なる航路なのか新世界なのか、それとも4つの海の中のどれかなのか定かな事はわからない。

しかも1週間経っても悪魔の实の能力の詳細はわからんし、人里は一向に見つからないし最悪だ。それに原作何年前かということもわからない。

つと、悪魔の实を食べたつてわかったのは、海に浮かぶ航海日誌を取ろうとした時に気付いた。

足しか浸かってなかったのに妙な脱力感があるからもしかしてと思つて肩まで入つて浮かぼうとしたらやっぱり無理だった。

それから更に2週間、毎日歩いているにも拘らずもと居た場所にも戻れないし人にも会わない。更には能力の詳細もさっぱりと言う状態に進んでいた。

そんな生活にも転機がやって来た。

「街だ……」

目の前には広大に広がる、中世にしては栄えていると言う印象を受ける大きな街。

3週間も海岸線を歩き続けたおかげで、とうとうこの街の港にまで着くことが出来たのだ。

これを快拳と言わず、なにを快拳と呼べるだろうか。それなのに

「見てあれ、たぶん捨て子よ。どうせごみ山から食糧目当てで来たのよ。臭いし汚いし、近寄りたくないわ」

「でもどうやってこっちまで来たんだい？メルシー」

「そんなこと知らないわ、ジョン。でも港の方から来てたんだから回って来たのよ。どれだけ貴族に憧れてるのよ、ププッ」

「はは、そうだね、メルシー。あんな汚い餓鬼が来たところでこの街で何かをしてやろうなんて考えるヤツは居ないさ。だってあいつはゴミ山から来たただのゴミだろう？端町のヤツらより屑さ」

「ジョンの言う通りだわ。ゴミになにをあげても宝の持ち腐れ、豚に真珠だもの」

「「あーっはっはっはー!!」」

見ただけで嘲笑を浮かべられ、蔑まれる始末。

激しい殺戮衝動の前に、体に引っ張られて幼くなりかけている精神

の所為で涙が出てきそうになる。

この体、この10歳くらいの体で泣いても社会的になにも問題ないだろうけど、それでもここで泣いてはダメだと、泣いても無駄だと脳が指令してくる。

そんな状況で街を散策できるわけもなく、俺は一先ず街を出て森へと戻った。

落ち着いて考えてみればさつき『ごみ山』とか『貴族』とか『端町』とか言ってたな。あいつら以外にも訊き覚えのある単語を使ってたヤツもいた。

と言う事はここは東の海のゴア王国か？

人の心は底辺だったけど、外観は綺麗な街だったし。

「取り敢えず安心して暮らせる場所……不確かなものの終着駅に行くか」

選択肢としてはフーシャ村と言うのもあったが、俺みたいなヤツでも普通に居られるのはそっちの方だと思って不確かなものの終着駅にした。

でもこの決断は間違っていた。だって

「うわあああああ！！」

『ガルルルルル！！』

決断から2時間後、虎に追い掛けられてるんだから。

大して鍛えもしていないし覚悟もない10歳児がああ険しい道のりを越えて不確かなものの終着駅に辿り着くこと自体が困難なことを忘れていた。

山道を走る事には慣れているが、虎から逃げ切れるほどの脚力なん

てものは持ち合わせていない。

『ガールルルル！！！！』

もうだめだ！！食われる！！

あまりの危機感から無我夢中で足に力を溜めて倒れ込む様に一気に前へと跳んだら、普段の4倍ほどの脚力で森を突き進み、虎との距離を引き離れた。

「……今のが能力か？加速する能力？」

いや、考えてもわかるわけないよな。

取り敢えず森に戻っても能力の使い方がわからないままじゃさっきの二の舞だ。

服を綺麗に洗い直してもう1回街に行ってみるか。

今度は誰からも蔑んだ眼差しは向けられずに街の中に上手く溶け込むことが出来た。

まあその為に服を洗ったり髪を洗ったりで結構な時間を浪費してしまったわけだが、その時に初めて自分の顔を見た。

長く艶やかな白い髪に黒色の瞳、丸い目に薄い唇、普通の人より整った顔立ちで……まるで禁書の一方さんだった。

なんかでも少し丸みが帯びていて目もそこまで吊り上がって無かったから女っぽかったのも事実。

まさか自分が女に憑依したのかと焦りもしたが、今ではどうでもいい事だ。

さて、それよりも街の図書館に来てみたのだが、今は如何やら原作開始15年前らしい。

海賊王の処刑が7年前、エッドウォーの海戦が10年前、金獅子の脱獄が5年前という資料はたくさん見受けられたからな。

それじゃあ今度は悪魔の実大図鑑だ。

そう言った類の本は結構目立たない様なところに置いてあったので、少し隠れながら探す俺にとっては見つけやすい場所であった。

「えっと……自然系ロキアの可能性と動物系ソオンの可能性はないよな。自然系ロキアだったら石とか自分にぶつけたらすり抜けただろうし、動物系ソオンなら身体能力の向上とか、肉食系のヤツだったら血が欲しくなったりするだろうからな」

そう言う意味でも俺は超人系パラミシアの可能性が高い。

悪魔の実大図鑑に載っている悪魔の実の種類なんてほんのわずかだ。もともと数が少ないのにそんなに厚くなるわけがない。

その中から俺が食べた悪魔の実に酷似しているものを探すことなど、至極簡単。

あつた。

実の名前：ヤジヤジの実

詳細：野次を飛ばすのが好きになったり、野次馬根性が芽生える。数ある悪魔の実の中でも最弱の悪魔の実。この実を食べて得をしたものは新聞記者しかない。

うん、それじゃあ俺は将来新聞記者になろう。それか国会議員とか。

じゃなくて。これはどう考えてもおかしいだろ？こんなものがあっていいものか。

それにこんな悪魔の実だったらあんなことは起きない筈だ。大きなイナゴから追われて逃げる時に異常なほどに加速したあの現象を。

詳細もわからずそれつきり能力の発動がなかった為極度の突風が追い風になって加速したと考えもしたが、やっぱりあれは能力だったのだ。

この【ヤジャジの実】のな。

でも野次と加速にどんな因果関係があるんだ？

・
・
・

はは、そうか。そう言うことか。それならこの世界では役に立たない悪魔の実と捉えられても仕方ないな。

この世界じゃ数学とか幾何学なんてものは発達しておらず、航海術と造船技術が主なのだから。

つまりなにか言いたいかと言うと俺の悪魔の実の能力は矢印、つまりベクトル操作だ。

あらゆるものの向きと大きさを操作できる、と言ったところか。イナゴライダーから逃げる時に加速したのも、自分の意志ではないにしろ自然とベクトルを操っていたらしい。

「……………これ、最強じゃね？」

なんとなくそんなことを呟かすにはいられない一件だった。

Episode 3

「もし海賊王に子供がいたらどう思う？」

街の端っこ辺りの不良が溜まる場所で、黒髪の子供がそんなことを不良共に訊いていた。

もし海賊王に息子がいてもその息子に抱く感情なんてない。

親が世間的に悪だからと言ってその家族まで蔑むなんてのは屑だ

まあそんなことはただの綺麗ごと。実際に犯罪者の家族が俺の家の隣に住んでいるとしたら俺は即行で逃げる。

人間なんて所詮はそんなものだ。自分がかわいくて仕方の無い生物なんだ。

俺にとってはそれも前世までの話で、現在はその海賊王の息子がいる世界の住人で、そいつが好きだ。

それに俺はもうこの世界で自由に生きて良いんだぜ？他人に流されるのなんてもうやめようぜ。

だから俺は別に構わないと思うよ。親は親、子供は子供じゃないか。

「そんなの決まってるだろ？即刻処刑だよ、処刑！そんなやつに生きる価値なんてねえんだよ！誰もそいつを望まない、誰もそいつと関わろうとは思わねエ社会のゴミさー！」

『ヒヤーツハツハツハ！！』

うつわ……キモイ程のテンションで笑いだす不良共って何処の世
界でもキモイな。

その言葉に雀斑の子供の方は怒りのボルテージ上がってるっぽいし。
何もしてない海賊王の息子より、人の気持ちを思いやれないお前ら
不良の方がゴミだろ。

「俺はそうは思わねエけどな」

「……なんだてめえは？この餓鬼の仲間か？」

「でも兄貴、餓鬼ですけどいい女ですぜ」

「グへへ、それもそうだな。どうだい、嬢ちゃん。そんな餓鬼は見
捨てて俺らの仲間にならねエか？」

なんて言うか……やっぱ気持ち悪い連中だ。

見た目20代後半のヤツらが屯して、それが10歳程度の子供にし
か見えない俺を犯そうなんて考えるとか。

まあ俺はこの容姿については以前よりも気に入ってるけど。

「いや、断る。ツて言うか俺はこの餓鬼の仲間じゃねエし、男だし
な」

『な、なんだって!?!』

そ、そんな三流作家の三下みたいな台詞言われても……俺は別にキ
モイとしか思わねえぞ？

「んじゃ、始めようか」

「なにをだ？」

「そんなの決まってるだろ？街の不良とお前ら曰くかわいい女の子の様な少年、それに路地裏っぽい暗い雰囲気のところ。これだけ揃えば……喧嘩しかねエだろ？」

それだけ揃えば普通俺が身包み剥がされて犯されるんだけどな。そんなこと言えば問題あるだろうし、健全な男子の前だし。

「おもしれえ。餓鬼が大人に逆らうってことがどういうことか教育してやるよ」

「おい、俺の喧嘩に手え出すな！」

ちよつと海賊王の息子さん？俺の喧嘩って……10人を超える人数の不良相手に幼稚園児くらいのヤツが1人で勝てるわけないでしょ。それでも鋭い眼光で睨まれるとこっちが引き下がらないといけない気がするのは何故だ？
それと同時にこいつなら負けないだろうと思えてしまうのも。
これが霸王色の覇気を持つヤツの人を牽き付ける才能みたいなものか？

「それじゃあ半分ずつでどうよ？」

「……負けたら殺す」

負けたヤツに更なる仕打ちをする気ですか、あんたは！

まあいい。どうせ負けないし。悪魔の実の能力使えば余裕だし。

「ゴチャゴチャ言っつてられるのもこれまでだあ！」

「はっ！上等！来いよ、三下ア！」

「おらあああ！！！」

「あーあ、疲れた」

不良共はやっぱり何処の世界でも見かけ倒しらしく、どんなに敵つ
いヤツでも不良は不良に過ぎなかった。

あのレベルなら本当に海賊王の息子だけでも勝てたかもな。

「疲れてないだろ。一步も動いてないのに」

珍しいな、海賊王の息子の方から話し掛けて来るなんて。

これも喧嘩を共にした一体感みたいなの、一種の吊り橋効果みたいな
ものか？

「そりゃそうだ。あんなヤツ相手に動くほど俺は体育会系じゃない
からな」

ツて言うかあれだな。体育会系じゃないなら喧嘩なんか吹っ掛ける
なツて言う話だな。

それでもイラツと来たから仕方ないんだよ。

「どつという原理だ？」

はっはー、読めたぞ。こいつ俺に興味があるんじゃないやなくて俺の悪魔の
実の能力に興味があるのか。
まあ東の海じゃイースト・ブルー悪魔の実なんて伝説みたいなものらしいからな。

「俺の能力。ベクトル……ッて言ってもわかるわけないか。向きと
大きさを自在に操れるんだ。それよりも海賊王の息子、お前こそど
ういう原理だ？その小さい体でどうやったらそんな規格外の体力が
つくんだよ」

動かなかったのは俺に触れる地面以外の物理的何かは大きさを3倍
にして力の向きを180度変えてるから。
それで不良は俺を殴ろうとして勝手に自滅したわけだ。

「ッ！！？」

えっと……なんでそんなに警戒心丸出しにして「何故俺が海賊王の
息子だとわかった！？」みたいな顔されても困るんだけど……。

「はあく。言っただだろ？もし『海賊王に子供が』とか。そんな
の本人じゃないと訊かないだろ。それともお前はその海賊王の息子
と友達か？」

「（あ、あいつ俺の心を読みやがった！？しかもあの洞察力……く
っ！）」

いやいや、海賊王の息子さん。悔しさとか感嘆とか普通に表情に出
てるから、そんなに驚く事じゃねえんだけどな。

昔から人の顔色ばっか覗って生きてきた日本人だからな、この程度
は寧ろ当り前だ。

しかもこの世界のヤツって異常なほどに素直でわかり易いし。

「それでどうなんだ？お前は海賊王の息子の御友達なのか？」

「…………お前はと思うっ？」

今度は急に暗くなりやがって…………表情豊かに育ってるじゃないか。それもこれもガーブとかダダンとかのお陰なんだろうな。

「さつきも言わなかったか？俺は親が海賊王でもなんとも思わないよ。気が合えば仲良くなるし、合わなくても蔑んだりなんかはしない。お前はどうなんだ？もし友達が海賊王の息子だったら…………どう思うっ？」

「…………俺は…………」

過去最高に暗くなりやがったな。ま、逢って間もないからこれがこいつの普通かもしれないけど。

「ま、その話はこの辺にして名前教えてくれないか？」

「…………エースだ」

「そっか、いい名前だな」

「べ、別にそんなんじゃないよ…………！！」

ははは、エースもかわいいんだから。そんなに照れるとは思わなかったな。

それにこれだけ照れるってことは海賊王がつけた名前を気に入って

るって言う事だし。

「お前はなんて言うんだ？」

「……俺？」

「俺も名乗ったんだ。お前も名乗れ」

そんなこと言われてもなあ。俺に名前なんてないし。

顔はアクセラレータだから……そうだな。

アクセラレータ……は在り来たりだし……いい名前が思いつかないな。

「そんなに悩むことか？自分の名前だろ？」

「いやさあ、俺って親もいないし名前もないから。どんな名前がカッコいいかな、って」

まあ名前を訊ねられて唸るのはエースじゃなくても不審に思っし気持ちはいいものじゃないよな。

それでも俺の言葉を訊いてまた表情を暗くしてくれるくらいにエースは優しいヤツってわかったけど。

「じゃあエースがつけてくれよ、俺の名前」

正直俺の皆無なネーミングセンスじゃ無理だ、カッコイイ厨二的な名前を編み出すのは。

「俺が決めていいのか？」

「いっていいって！俺には友達って呼べるのは今はエースくらいだし、お前につけてもらった名前なら文句ないさ」

「友達……か」

そんなに感慨深そうな顔してもこれ以上は何も出ないぞ？
名前付けてもらった時に礼くらいは出るけど。

「それじゃあシロ」

そんな自信満々に犬みたいな名前付けられて俺が礼を言うと思って
るのか？

しかも絶対に見た目だけでつけたしな。

「それはダメだ。俺は野原家の犬じゃない」

「文句ないって言わなかったか？」

いくら俺でも犬みたいな名前は勘弁だつて。

「今回は別だ。次！」

「じゃあ……アーニヤ」

「俺は男だぞ？」

そんな女みたいな名前を平然と出されても困るんだが。

「じゃあ……アクセラレータ？」

この名前は何処から出て来た！？お前は電波さんか！？

まあいいとして、エースって結構名前とかがポンポン出てくるヤツなのな。

まあそれだけ適當ッて言う捉え方も出来るけど、この名前ならいいな。

自分で思いついた時は微妙だったけど、改めて人に口にされると悪い気はしない。

いい感じに厨二だし！

「うん、それがいい。ありがとな」

「か、構わねえよ……！！」

また照れちゃって、やっぱりエースも未だ子供なんだな。

俺は基本的に一通さん状態でいることにした。

つまり日常生活に必要なもの 例えば重力・空気・光などといったモノ以外のベクトルは全て反射するように、能力を常時発動させていると言う事だ。

必要とあらば視覚や聴覚、嗅覚などのモノも反射させるが……今、それが必要な時が来た。

「くっせー……ホントにこんなところに住むのか？」

「まあな。そんなイヤな顔するなって。俺は臭くならないから」

俺は決めたのだ。

悪臭の漂う街ではなく、ここ、グレイ・ターミナル不確かなものの終着駅に住むと。

何があってもあの街の中は御免だし、かと言ってエースと一緒にダダンの家に住むのは迷惑が掛かるので気が引ける。

エースはそれくらい構わないと言ってくれるが、エースはエースでダダンはダダンだ。意見の相違で、家主であるダダンはそう簡単には納得しないだろう。

あれでもエースが処刑されたのを知ってガープを殴ったり、エースとルフィの船出の時には陰で泣いたり優しい一面のある彼女だからこそ、面倒は掛けられない。

あの人のことだから懇願すれば住む場所くらい提供してくれて、ご飯と水も提供してくれることがわかるからこそ、俺はここに住まなければいけないのだ。

「それもそうだな。その便利な能力があればセラが臭くなることは

ないだろうし、セラは全く臭わないんだろ？」

だからそんな怪訝な顔するなって。
未だ5歳の箱入り前の子供に皺なんて作ってもらったらこっちの気が滅入る。

それにエースがこの歳で皺でも作ってみる。あの子煩惱なガープとダダンが何言うかわかったモンじゃない。

因みに言うところ『セラ』ってのはエースが『アクセラレーター』って長いから呼びにくい』という理由でつけたあだ名。

お前……自分で決めた名前だろ？

などと心の中で突っ込んではいたが、まアイヤではないので許諾している。

「そ。だからお前が臭くなっても俺は何も感じない。だから安心しろ」

「うっせーよ！俺は臭くなんかならねえ！」

「確かにここにいれば臭くなってもわからないからな。もともと臭くてもわかんないし」

「だから俺は臭くならねえって！それにもともと臭いわけでもない！」

「ククツ……そんなに顔真っ赤にして怒ることないだろ？冗談じゃねエか」

「セラが言つと冗談に訊こえないんだ！」

ははは、やっぱエースは面白いな。

一緒にいて飽きないって言うか、そう、こいつは同じことをあんまりしないだよ。

たぶんそれは子供だからこそそのなせる業。

子供っていう生き物は大概のものには簡単に飽きてしまうもの。

例えば小学校で纏まりの無いクラスを纏める時に『黒板に5つの輪を書き、それが昼まで残っていた輪の数だけ休み時間を5分増やす。その代わりに1人でもいけないことをしたら一つ輪を消す』という事をしたりする。

最初のうちは効果観面でみんなが纏まるが、3日もすれば効果は薄れて、興味もなくなっていく。

用はそれと同じで、子供のエースは行動のパターン化がイヤなのだ。逆に言えば歳を重ねるとパターン化された行動の中に少しの違いを発見しながらそれを楽しんで生きる。

故に親とその子供の趣向 現代でいえばテレビ・漫画・小説の趣味などの価値観が合わない。

一番良い例がドラゴンボールとワンピースだ。

ドラゴンボール世代はワンピースに嫌悪感 ワンピースの人气がドラゴンボールの人气を上回るのではないか？という前者への固執からくるもの を示して読むことすらしないのと同じ。

俺はどっちも好み とかよりドラゴンボール戦闘漫画とワンピース冒険漫画って言う全く別のジャンルの漫画を比べるヤツの頭が逝かれていると思うタイプだ
が。

そんなのプリンターに長距離走らせるようなモンだろ。馬鹿じゃねエの？

「やべ……話が逸れ過ぎた……」

なんか最後の方は俺の主観になってたな。

「何がだ？」

「いや、何でもねエよ。それよりもあそこにいるヤツも仲間にしねエか？」

脳内で色々と考えていた時に少し辺りを見回してみたのだ。

当然の如く大半はゴミの塊で、それらからは不自然に煙が焚かれている。大方ゴミが太陽光や熱で温もりを持ち、それが外気との温度差で煙を発生させているのだろうが、それならこっちの太陽は素晴らしく照り上がってるな。以前のとは同じものじゃないと言う事は明らかだろう。

その他には少々の木が立ち並んでいるが、それらはまともなようだ。これならこの近海の海が綺麗なわけだ。

ゴミ（人間の死体も含む）と少量の木の葉や虫・動物の死骸が腐葉土の役割を果たし、綺麗になった雨水が川を下って海に流れ出る。

そしてそれがプランクトンの餌になり、完璧な食物連鎖を果たして生態系をつくり上げる。世界一綺麗な街の海までもがここのお陰で成り立っているのだ。

その海を構成している木々の中の1本に、短髪に黒のハットを被って無気力な目で遠くを見つめる少年が居た。

俺がエースに示したのはその少年だ。年頃もエースと同じくらいだし、友達になるにはちょうどいいんじゃないかと思って。

それにその少年には見覚えがあったしな。

「……………あいつ？なんでだ？」

（なんとなくだけど……………セラに逢う前の俺にちょっと似てるな。誰も近付けない様な雰囲気とか）

「エース……………今『前の俺と雰囲気似てる』って思わなかったか？」

「な、なんでわかったんだ!？」

やっぱりな。俺も似てると思ってた。

これならジャックナイフのエースとそのハットのヤツが原作で仲良くなれたわけだよ。

「気にするな。無い頭で考えると頭がパツクリ割れるぞ?」

「そのない頭じゃ考えられないから訊いてんじゃねえか!」

開き直って自分の脳の許容量の低さを認めるなよ。一緒にいる俺が恥ずかしくなる。

これは授業参観で子供が親の前だからって『みんな手を挙げるだろ』と高を括って見栄張って手を挙げたのは良いけど自分以外には誰も挙げなくて、それで『わかりません』としか答えられなかった子供を持った親の心境と似てるな。

まアそれと同じでそんな子供でさえ愛らしく思えるところまで似ている。

「そうカツカするな。お前の表情見るとそれくらいわかるさ。あいつを見た時にお前の顔に一瞬影が差したからな。ただそれだけのこと」

人間観察は日本人の得意分野って前も言ったようにこれくらいは当り前。

あとは色々と状況の観察とかも個人的には得意だな。

これらは戦闘で役に立つからな。これほど日本人で得したことはない。

相手を鎮めるための言葉を知っていれば当然神経を逆撫で指せる言葉も、言葉一つで撃沈したりも出来るし、相手の行動・思考のパターンの解析、相手の癖を見つけたたりも可能。

「そんな万能じゃねエっての。たったそれだけでみんなの考えてることがわかれば俺は気持ち悪くて死んでるよ」

「……死ぬのか？」

なんでそこで哀しそうになるんだよ。

あんなのただの例え話じゃねエか。

「意味わかんないって。俺はそんな万能じゃないから死なねエよ」

「そうか！」

そんな嬉しそうな顔して笑われるとさっき哀しませたのが俺の所為みたいじゃねエか。

いや、まア直接的には俺が哀しませたみたいなものだけど。

「それじゃあなんて思ってたんだよ」

「セラと逢えてよかった」

こいつ……真顔でそんなこと言って恥ずかしくねエのか？
馬鹿になんてしてない。ただすげーなって。

「それならあいつにも俺とエースに逢えて良かったって思わせねエとな」

「そうだな！シシシッ！」

何にせよ、先ずはあいつも独りであるよりは友達作って楽しんだ方が良いだろ。

孤独が好きってヤツもいるけどさ、そいつって結局はみんなで居る
事の楽しさを知らないだけなんだ。

周りを煙たがり、孤独なライフ。今時狼でもそんなことしないって。
さア！いっちょあいつにホントの楽しさを教えてやるか！

「なあ！一人で何やってんだ！？」

もつと違う話し掛け方はないのかと思うけど、そういった事に関してぶきっちな俺よりはまともだろうからこのままエースに任せるか。

相手が取引相手とかだったらやり易いけど、これから友達になろうかって相手に営業スマイルぶちまけても意味無いし。

「……………」

無視か。まア大体予想はついてたけどな。

それでも俺たちの方をチラッと見る辺り、多少の興味を示してくれたいみたいで、脈はありそうだ。

エースはそれに気付いてないけど……このままやらせてみるか。向こうのハットの少年だつて俺に誘われるより同年代のエースに誘われた方が感触がいいだろうし、その方が後々のこいつ等の為にもなる。

とか言いつつ俺は自信がなくて逃げているだけみたいなものだが。

「喋れないのか？それならそっちに行くぞ？」

無視されてるって言うのをこいつはこういう捉え方が出来るんだよね、ルフィと同じで。

そんな発想俺には思いつかないものな。だからこそ少年はエースに心を開く可能性がある。

「でもどうやって登るつもりだ？」

あの少年が登れたのならエースにも登れるだろうが、それまでに逃げられたら本末転倒だ。

「セラを使う」

俺を？そんな悪い笑みを浮かべながらだと碌な使い方される気がしないからイヤなただけだ。
それに使うつていうのは頂けない。

「まあいいか。それで、俺は何をすればいいんだ？」

そんなことで怒つても時間の浪費だと勝手に脳が判断して、早速エースを一気に大木の上まで登らせる作戦の旨を訊く。

「俺がアクセの手に飛び乗って、アータがそれを押しだす。それだけ」

あゝ、そう言うことか。

「それならお安い御用だ。来い！」

「よっし！そりゃー！」

「行って来い！ツて痛ッ！」

予定通り投げてエースは少年のところまで辿り着いたみたいだけど……忘れてた。俺は『反射』するようにしてたんだ。

受動的に來たエースの衝撃はそのままエースに返して跳ぶ力を増幅

させるンだけど、能動的に内側から衝撃を加えたら当然俺の方に返って来るよな……。

体も鍛えてないし、結構痛いな。取り敢えず内側からの衝撃も空気とかと同様に反射しない様に設定しとくか。
うーん、やっぱり体も鍛えた方が良いのか？

まア今はそれよりもエースの方に集中するべきだな。

「なあ、俺たちと友達に　　って逃げるな！くっそー！セラ！追っぞー！」

……言葉一つで勧誘失敗してんじゃねエよ！？

まア今のは少年の方も話を訊く気が無かったからいいか。

それよりも逃げる少年の速いこと速いこと。

ターザンよろしく木の枝とか蔓を利用して見る見るうちに引き離されちまう。

「くっそー！あいつ速えな！」

あの森に慣れてるエースでさえも追いつけないスピードだからな。

俺？俺は森の中を走るとか慣れてないから無理だ。飛行しても良いけど未だ森の中を飛べるほど制御できないモンな。

と言っよりさ、ここの世界の5歳児は異常か？団塊の世代か？

5歳児であそこまでの動きが出来るとかそれだけで十分チートじゃん。蔓使っとか握力半端じゃねエし。

それも5歳児っていう軽さを武器にしてるわけだけど、それでも凄いだろ。

「セラ！このままじゃ逃げられる！何か良い手とかねえか？」

「そんな簡単に思いつけば苦労しねエって。思い浮かばないからこ

うやってただ追いかけてるだけだつてのに。まアあるとすれば2人で徐々に追い込むくらいしかねエンじゃねエの?」

「そうか……。ならそれで行くぞ!」

それって俺の提案した風漬し的な要領の、要領の悪い作戦か?

時間掛かるし体力も使うしやりたくないけど……これが一番の近道だよな。

これも体力をつけるためと思えば辛くない……か?

「うっし!それじゃあエースは右から行け!俺は左から行く!追いつめる場所は門だ!」

「りょーかい!」

それに楽しそうに追いかけてこをするエースを引き留めてまでゆっくり作戦会議をするほど俺も無粋じゃねエからな。

さて、まだ俺でもハットの少年は確認出来る。

そもそも見失ったら追いこみようがないけど。

でもさア、こういうのって監視カメラとか携帯通信機とか使って後方支援してくれたり連絡が取れるから出来ることだろ?

しゃーねエな、ホント。

俺が能力で2人の位置を感知しながら動きまわって追いつめるか。

「っーかまーえたっ!」

「何なんだよお前ら！俺になんか恨みでもあるのか！？」

当初の予定通り、端町と不確かなものグレイ・ターミナルの終着駅を遮断する門の前でハットの少年捕獲完了。

捕まえたとは言ってるが、これから友達になろうって相手を縄で縛ったりなんてことはしない。

少年も観念した様で逃げる気はないために、それでも大丈夫なのだ。これが暗黙の了解、日本の特有文化の一つでもあるな。

玄関のちよつとだけ盛り上がったモノ、敷居を跨いだ先と跨がずにいる空間とでは、次元が違うのだ。

たった少しの段差。薄い一枚の障子。傘の中。たったそれだけで繋がる空間を遮断することが出来る程に日本は奥床しい。

まア高貴な出身であるこの少年は日本人ではないにしろ、そういう良識があったり、見聞があるのだろう。

「恨みなんかねエよ。俺たちはただお前と友達になりたいだけだ」

「それなら追い回すことはねえだろ！」

「でも先に逃げたのはそつちだろ？」

ここまでくればエースは放っておこう。

ここから先は俺　日本人の得意分野だからな。

「それはお前らが邪魔したからだろ！？」

「……邪魔？」

はて、俺とエースは少年を憤慨させるほどの邪魔をしただろうか？
ついわけがわからずにエースと目を合わせてお互いに頭を傾げてし

まった。

「そつだ！折角鳥を観察してたのに逃げられただろ！？それを怒らずに何を怒ればいいんだ！？」

あっちゃー……俺つてすつげー勘違いしてたな。

他人を寄せ付けない様な雰囲気は自然と同化して鳥たちに警戒心を与えない為か。

無気力に感じられた目も同意で、鳥たちが見られていると言う事に気付かせないため。

そう考えるとエースが叫んだときに無言で一瞥くれたのも合点がいく。

良く考えればこの少年が逃げた方向は鳥の居た方だった気がしないでもない。でも結局最後はそんなの関係なしに俺たちから逃げてたな。

「それなら俺らが悪かった。でもさ……そうなら言ってくれば良かったのに。俺らだって邪魔する気はなかったし、そうとわかってたら俺も一緒に観察したのに」

俺もここらへんの動物は面白いから観察するのは好きだ。獰猛なヤツ意外な。

特に鳥は良い。小さいヤツから大きいヤツまで、鳥は好きだ。カラスとか不気味系以外。

「お前……鳥が好きなのか？」

「ああ、好きだよ」

「それならさ……こんな伝承知ってるか？」

昔ここ、ゴア王国には大きな怪鳥がいたんだ。その頃は人間と共存して上手くやっていたんだけど、ある日国民以外のヤツらがこの国に乗り込んで、怪鳥たちを追放したらしいんだ。それで追放された怪鳥たちは違う島に定着し、そこでは怪鳥が恨みを晴らすために人間を今でも支配しているらしい。その怪鳥は昔も今もこの国の名前『ゴア』と鳴く。

まあただの伝承に過ぎないんだけど……面白いだろ？」

今まで興味なさそうだったエースでさえも、少年の話に訊きいつていた。かくいう俺もガツツリと。

それもそのはず。俺にはその『ゴア』と鳴く怪鳥も、その怪鳥が住む島も、そこで支配される人々のことも知っているのだから。

怪鳥の住む島はエースの生まれ故郷のバテリラと同じ南の海にあるトリノ王国。一説では宝島とも伝えられる島だ。サウス・ブルー

原作ではチョッパーがくまによつて飛ばされ、そこでチョッパーが人間と鳥の仲を取り持って和解させることが出来た。

そんなことって……いや、まア伝承に過ぎないと考えればいい話なのだが、原作じゃそれを臭わす様な発言もあつたわけだし……ああ！モヤモヤする！

「あア、すげエよ。俺もいつかその鳥に逢つてみてエな」

「だよな！俺も逢いたい！」

「それなら海賊にならないか？」

興奮する少年を俺は微笑ましく思っているとそこにエースが割り込んできた。

このタイミングで海賊への勧誘か？まアいいタイミングではあるが。後はエースの力量次第だろ。

「海賊？」

そりゃあ不思議がるのも当り前だよな。

邪魔され、追いかけられた後には海賊への勧誘。俺でもそんなことされたら力オスだ。

「ああ。海賊になって世界中の海を見て回るんだ！その時にその島も見つけて、鳥たちに逢うんだ！それからもいっぱい旅して、強いヤツと戦って、仲間を増やして、いずれは海賊王になるんだ！」

……ふつ。こいつ、ホントにおもしれエ。

その壮大な夢は持ち続ければ、こいつになら実現できるかもしれないって、原作を知ってる俺にも思わせるこいつの魅力。これはホントに頼もしい。

「いいな！それ！でも海賊になるのに必要なモノってなんだ？」

「先ずは仲間！それと船！それから海賊旗があれば完璧だ！」

「そうか。うーん、仲間は最低でも10人は欲しいな」

「だろ？それで最初の仲間は絶対に音楽家だ！海賊は歌うからな！」

「だな。それで……あつ、そうだ。未だ名前教えてなかったな。俺はサボ、よろしくな」

2人とも楽しそうに語りやがって……でも最初の仲間は航海士を推奨するぞ？

それとも音楽家を最初に仲間にするって言うのはこの世界では固定

なのか？デフォか？

「俺はエース。で、あっちがアクセラレータ。俺はセラって呼んでる」

「そうか。よろしくな、エース、セラ！」

サボ……楽しそうだな。

俺が友達と居る時の楽しさなんて教える必要なんてもともと無かったのか。

「ああ、よろしく、サボ」

「よろしくな、サボ。」

それでさ！やっぱ海賊になるためには先ず船だろ？海に出ないと話にならないからさ」

おい、お前はさっき先ずは仲間が必要とか言ってたか？
ツて言うかサボもそこに気付いて突っ込めよ、頷いてないで。
もしかしてサボは俺が思っていた以上に馬鹿か？

「それなら金が必要だな。でも船っていくらで買えるんだ？」

「さア……セラは知ってるか？」

俺が何でも知ってると思ったら大違いだぞ？

こっちの世界の船　こいつ等が言うのは一般的な帆船だろう
の値段なんて気にしたこともない。

「まア海賊になるまで貯金して、それで船を買って余った分は違っ

モノ買えばいいんじゃないの？」

「それもそうだな！それじゃあ今日から始めるか！海賊貯金！」

「よしっ！それじゃあ金目のモノをここから探すか！それで質屋に
ダッシュだ！」

まあ仲良くなったからいい………のか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0486p/>

転生っ子世にはばかり

2011年10月7日22時59分発行